

第2回 熊本県立済々黌高等学校

2つの実践的プロジェクトを軸に 「済々多士教育プログラム」を開発し、実践する



国際的に活躍できる人材の育成を図ることを目的に文部科学省が今年度からスタートさせた「スーパーグローバルハイスクール」(以下, SGH) 事業。246もの申請校の中から厳しい審査を通してSGHに指定された56校は、これから5年間にわたり独自のプログラムによってグローバル・リーダーとなり得る人材の育成に努めていく。今号ではその中から熊本を代表する進学校、熊本県立済々黌高校を紹介する。

国際社会で活躍できる人材に必要な 資質と能力の育成を目指す



明治15年に創立された熊本県立済々黌高校は、132年の歴史を持つ全国屈指の伝統校である。卒業生総数は4万人を超え、国内外の政治、経済、学術、医療、文化分野をはじめとするさまざまな方面で活躍している。

進学面では、東京大学、京都大学などの国立大学や有名私立大学に多数の卒業生を送り出している。さらに生徒の9割超が部活動に参加するなど、文武両道の気風は強固である。

当然、地域が同校にかける期待は大きい。これからの時代に求められる人材、つまり国際社会に貢献できる人材の育成は、建学の精神である三綱領の一つ「磨知識 進文明(知識を磨き文明を進む)」と合致している。

そんな中、今回SGHに指定された同校は、今後5年間で、「国際的素養を備え世界をリードする済々多士教育プログラムの開発」を開発構想として研究を行っていく。

このプログラムを通じて目指すのは、世界を舞台に挑戦し、さまざまな分野で活躍できるグローバル・リーダーに必要な資質と能力の育成であり、そのために必要な指導方法の研究開発である。

環境問題をテーマに発信力を身に付ける 2つの個性あるプロジェクト



同校では、本研究を「SG Research Project」と「SG

Communication Project」という2つのプロジェクトを軸にして展開していく。

まず「SG Research Project」では、「持続可能性を確保する開発と地球環境保全のあり方」をテーマとして研究を進める。日本における公害の原点と言われる水俣病を経験した熊本県では、環境にかかわるさまざまな取り組みが展開されており、地元の大学やNPO、企業などで研究を行う人材も多い。そうした強みを生かして、地域の環境問題と世界の環境問題をパラレルに捉えながら研究を深めていく。

具体的には、1年次でグループ研究を実施し、グループごとに研究論文の作成を行う。2年次には個人研究に移行し、国内ワークショップや海外フィールド・トリップなどの活動を経て、個人研

究論文を作成する。その研究内容は、

3年次において日本語と英語の論文にまとめ上げ、専門家との論議を経た後に、英語でプレゼンテーションを実施するというものである。SGH担当主査の鶴濱正悟先生は、「3年次に行うプレゼンテーションは、大学や企業との連



SGH担当主査 鶴濱正悟先生

携を生かして、将来的には世界に向けて発信できるレベルを目指したいと思っています」と抱負を話す。

一方の「SG Communication Project」は、1年次のDDP講座(Discussion / Debate / Presentation)と2~3年次のCS講座(Communication Skill)を通して、自分の意見や成果を英語で発表したり議論したりすることで、実践的なコミュニケー

ション能力の育成を図る。

「即興型ディベートを大阪府立大学の中川智皓先生の協力を得て、既に計画的に実施しています。その場で簡単なテーマを与える『即興型』のディベートは、『制服の是非』、『宿題の是非』など、生徒にとって身近なテーマを与えるため、多くの生徒が構えることなく活発に英語で発言します」と鶴濱先生。

今後は留学生などのネイティブ・スピーカーと触れ合う機会も積極的に設けていく予定で、7月には* アフリカからの留学生らとユニセフ主催の水俣病研究ツアーに出かける。*取材時予定

4つの観点から 「国際的素養」を定義する



済々黌高校の本研究のプロジェクトを支える影の力として、同校では英検の積極的活用を考えている。本年度からは、学年ごとの達成目標も定めた。「1年生は準2級、2年生は2級合格を通過点としての目標に設定しました。『級』というとても分かりやすい形で自分の実力が分かる英検は、生徒に満足感を与え、自信につながります。その結果、準1級や1級、IELTSなどにチャレンジしていく生徒が増えてほしい」と鶴濱先生は語る。

SGHの指定を受けたことで、これから済々黌高校には次世代

のグローバル・リーダーの育成が求められるが、同校が育てたいグローバル・リーダーについて、山本朝昭副校長は「機軸を日本に置いて世界に発信できる人材、相手を納得させ得る誇りを持った人材」だと語る。

副校長の言葉は、今回の研究課題として同校が掲げる「国際的素養を備



山本朝昭副校長

えた人材」を端的に表現している。済々黌が考える国際的素養とは、以下の4点である。

1. 国際感覚（現代社会への関心と地球的視野を持ち、なおかつ日本人としての深い教養を身に付けていること）
2. 課題設定・解決力（問題意識と論理的思考を持ち、それを解決する能力も持つこと）
3. コミュニケーション能力（情報伝達のツールとして活用できるだけの英語力などコミュニケーション能力を持つこと）
4. 批判的思考と創造力（既成の概念を超えた創造力を持ってイノベーションにつなげる力を持つこと）

大きな可能性を秘めた同校の生徒たちには、「国際的素養を持つ力は十分ある」としながらも、「難を言えば、今まで本校の生徒は内向きだったということでしょう。例えば進路にしても、海外に目を向ける者は少なく、留学という進路選択をする生徒は数名に留まるという状況でしたから」と鶴濱先生は話す。そして山本副校長は「内向きなのは本校に限ったことではなく、困っていないからそれでよしとする現状肯定の温もりから脱し切れなかったからです。学校と生徒の双方が現状への問題意識を持つことが、新たな領域と価値を創り出します。そのような意味でも、今回のSGHへの指定は内向きを外向きに変え、真のグローバル・リーダーに向かう大きな契機になると考えています」と解説する。

SGHの指定を受け、これから済々多士（グローバル・リーダー）を育てていこうという今、済々黌では教師たちが口々に「まず私たちが学んでいかなければならない点が多い」と語る。その熱意は必ず同校の生徒たちに通じ、地域が、そして先輩たちが期待する済々多士を生み出していくことだろう。

新しい世界への扉, IELTS

IELTS (アイエルツ) は世界で認められた英語能力試験です。

IELTS (International English Language Testing System) は、留学や海外移住に必要な英語力を評価する試験としてイギリス、アメリカ、オーストラリアなど135カ国、9,000以上の教育機関、国際機関、政府機関で認められています。全世界での年間受験者数は220万人を上回り、量・質ともに世界をリードする地位を獲得しています。

海外留学・移住の実現へ。目的に合った英語力を測ります。

IELTSは合格・不合格を設けず、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキングのスキル別のスコアを提示します。また、試験は留学向けのアカデミック・モジュールと移住向けのジェネラル・トレーニング・モジュールの2種類があり、目的に合わせてお選びいただけます。